



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第30主日 C年(2022年10月26日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：シラ書 35章15b—17、20—22a節

第二朗読：テモテへの手紙二 4章6—8、16—18節

福音朗読：ルカによる福音書 18章9—14節

みことばで^{いの}祈る、共同体の祈りと個人の祈り

解説

福音朗読ではファリサイ派の人と徴税人^{ちようぜいにん}が登場しています。11節と13節の二人の祈る様子^{ようす}が対照的^{たいしょうてき}です。11節の前半を語順^{ごじゆん}の通りに訳してみると「ファリサイ人は 進み出て で 自分自身 これらのことを祈った」となります。新共同訳は「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った」となっており、フランシスコ会訳は「ファリサイ派の人は胸^{むね}を張^はって立ち、心の中でこう祈った」です。岩波書店の訳では「ファリサイ人は進み出て、自分の[心の]なかで[こう]祈った」となっています。訳語の善し悪し^{やくご よ あ}はともかく、ファリサイ派の人が自分で立ち上がって祈りはじめたことがわかります。

それに対して13節では同じように語順の通りに訳してみますと「しかし、徴税人は 遠く離れて いて しなかった 目(複数形)を 上げようと に 天 しかし たたき続^{つづ}けていた 胸を 彼の 言うのには 神よ 憐れんでください わたしを 罪人の」となります。徴税人の祈りは堂々^{どうどう}としたものではなく、自分自身を見つめての祈りであることが分かります。

ファリサイ派の人の「心の中でこのように祈った」(11節)は未完了^{じせい}という時制が使われていますから、ニュアンスとして「ずーっと祈った」、「長々と祈った」となります。彼の祈りには感謝と神さまへの誠実^{せいじつ}さがあります。ですから、当時の模範^{もはんてき}的な祈りです。罪を犯^{つみ}すことから守^{おか}られていることに感謝し、律法^{りっぽう}の規定^{きてい}を遵守^{じゆんしゆ}して断食^{だんじき}をし、十分の一^{じき}を献^{ささ}げるといふ生き方をしていきます。

一方、徴税人^{たんじゆん}の祈りは単純^{たんじゆん}です。「わたしを憐れんでください」。しかし、これは『ルカによる

福音書』では一般的な「エレエソン メ」ではなく、「イラストレーティ モイ」です。直訳すると「わたしに贖いをください」となります。つまり、「ゆるしてください」と祈っているのです。彼の祈りは『詩編』51編の冒頭を思い起こさせます。この徴税人は神さまのみ言葉で祈ったのです。

説教 みことばで祈る、共同体の祈りと個人の祈り

今日の三つの朗読には祈りのテーマが展開されています。第一朗読では「謙虚な人の祈りは、雲を突き抜けて行き」（シラ 35 章 21 節）と、貧しい人、虐げられている人の祈りを神さまが聞き入れることが語られます。第二朗読の『テモテへの第二の手紙』では「世を去る時が近づきました」（2 テモ 4 章 6 節）と人生の終わりを迎えるパウロがこれまでの歩みを振り返りながら、必ず救いがあると確信を得ていきます。「主はわたしをすべての悪い業から助け出し、天にある御自分の国へ救い入れてくださいます」（18 節）のひと言はパウロの祈りから生まれたものです。

福音朗読では徴税人は『詩編』51編の言葉で祈っています。わたしたちも聖書の言葉で祈りたいものです。神殿ではイスラエルの共同体のための公の祈りが日に二度ささげられていました（午前9時と午後3時）。徴税人は2回目の祈りが終わったときに神殿へと上ったのでしょう。人気の絶えた西日の射す神殿の静かな境内で、先ほどまで行われていた共同体のための祈りでささげられたいけにえが焼かれている煙がまだ残っていて、それが細く天に立ち上っていく。そんな場面で徴税人は、細く立ち上る煙に託して祈りをささげたのかもしれない。

キリスト教は、ユダヤ教の伝統を受け継ぎながら、祈りの二つの姿を大切にしています。一つは共同体の祈りです。これは教会の公の祈りであり、礼拝です。言いかえるとミサです。ミサは共同体の祈りです。もう一つは信者一人ひとりがささげる個人的な祈りです。この二つの祈りは関係し合います。共同体の祈りは個人的な祈りを完成させます。個人的な祈りは共同体の祈りを通じて神さまのもとへと上っていきます。

シノド的な教会とは、個人の祈りと共同体の祈りがうまく調和している教会といえるでしょう。徴税人は、焼け残ったいけにえの献げ物から立ち上っていくか細い煙に自分の祈りを託さなければならなかったでしょう。しかし、わたしたちは、主イエス・キリストの御体と御血を通じて、祈りをささげていくのです。